先行研究における「ほめ」の扱いについて

叶　永会

キーワード：ほめの定義、ほめの分類、ほめの方法、目上に対するほめの配慮や工夫

要旨

語用論研究で言われる「ほめ」は、日常生活で用いられている「ほめ」より指す範囲が広く、目上から目下に対して「ほめる」行為と目下から目上に対して「たたえる」行為の両方を含んでいる。本稿は、先行研究で言う「ほめ」の定義を確認したうえ、「ほめ」の分類、対象、方法などの観点から検討した。

1. はじめに

日常生活で「ほめ」と言えば、「よくできたね」「いい出来だ」のような、目上から目下の動作への評価を表す言葉が頭に浮かぶ。目下から目上の動作を評価する場合は「たたえる」と言う。『大辞林』第三版の「ほめる」の項にも、「『ほめる』という動詞は、目上の人に対しては用いることができない。それに対して『たたえる』は文章語的で、ある人が社会的に見て好ましいことをした場合に、目上にも目下にも使えるが、自分の家庭内の人には使いにくい」とある。

しかし、語用論研究で言われる「ほめ」は、日常語としての「ほめ」よりも指す範囲が広く、目上から目下に対して「ほめる」行為と目下から目上に対して「たたえる」行為の両方を含んでいるように思われる。例えば、大野（2003）では、生徒から学生に対する「勉強になりました」を「ほめ」として認定している。また、田辺（1996）も「あなたの演技は本当に素晴らしかった」という表現は「相手を讃える」行為であり、相手に敬意を払い、称賛を表す表現で誠意が込められていれば、最大のほめことばとなり、「ほめる」行為であるとしている。そこで、本稿では先行研究で言う「ほめ」のとらえ方について、定義、分類、方法などの観点から検討してみたい。

2.「ほめ」に関する主な研究

「ほめ」に関する主な研究には次のようなものがある。

川口ほか（1996）は、「表現意図」の観点から日本語における「ほめ」表現行為を分類し、待遇表現の中に位置付けて考察を行っている。具体的には、「どういう相手を・どういう場で・どういう内容・どういう表現方法・どのような意図で」、つまり「相手・場・内容・表現方法・表現意図」から「ほめ」の待遇表現としての基本的な構造を解明している。

小玉(1996)は、人生対談のインタビュー記事を使ってその言語活動としての特性、ホストとゲストという会話の参加者の役割、ほめの談話での位置という観点からほめの

様々な機能を検証している。

「ほめ」について最も多く、多方面から総合的に研究をしたのは大野(2002、2003、2007、2009、2010)である。大野(2010)では、シナリオの発話資料を用い、日本語の談話における目上に対する「ほめ」と「謙遜」の多角的な分析によって、両言語行動における「働きかけ」と「わきまえ」の実態と、相互の関連性の一端を明らかにしている。

劉（2011）は、中国語の「ほめ」を、話題の分布、ほめ行為のパターン、ほめへの返答方法、ほめに影響を与える要素、ほめの社会機能など多方面から分析をしている。

楊（2012）は中国人大学生へのアンケート調査を実施し、中国語母語話者の目上への「ほめ」行動が実際に行われているかどうか、また行われているとしたら、どのように行われているのかについて、考察を行っている。

金（2012）は、実際の大学生同士の会話データを使用し、ほめる表現、ほめられる具体的な対象、ほめられたときの反応、さらにほめの談話の流れを分析し、日本語と韓国語の会話に見られる「ほめ」言語行動の類似点と相違点を明らかにしている。

3.「ほめ」の定義

前節にあげた先行研究のうち、「ほめ」について明確に定義をしているのは、小玉(1996)、大野(2010)、劉（2011)、金（2012）である。

・ほめるという言語行為は、話し手が聞き手あるいは聞き手の家族やそれに類する者に関して“良い”と認める様々なものに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的あるいは暗示的に、肯定的な評価を与える行為。

（小玉1996:61）

・相手自身、あるいは相手に関連する「よい」と認めうるものごとについて、明示的あるいは暗示的に肯定評価を与えることによって、相手への好感情を表す言語行動。

（大野2010:337）

・称赞言语行为是日常生活中常见的言语交际形式、是说话人对他人、尤指听话人所具有的某种双方认可的优势、如外貌、人品性格、所有物以及才能成就等、直接或间接地进行积极评价的言语行为。

（賞賛（以下「ほめ」とする）という言語行為は日常生活でよく見られる言語形式であり、話し手は他者、特に聞き手が持っている、両者に認められる外見、人柄や性格、所有物及び能力の達成などのいいことについて直接、あるいは間接評価を与える言語行為である：叶訳）

（劉2011:3）

・「ほめ」には「誰についてほめを行うか」という「ほめの相手」、「何についてほめを行うか」という「ほめの対象」、「ほめをどう実現するか」という「ほめの表現」、「なぜほめを行うか」という「ほめの意図」の四つの要素から「ほめの判断

基準」を抽出し、「ほめ」は、話し手が聞き手を心地よくさせることを意図し、聞き手あるいは聞き手に関わりのある人、物、ことに関して「良い」と認める様々なものに対して、直接或は間接的に、肯定的な価値があると伝える言語行動である。

（金2012:43）

これらを見ると、「ほめ」に関する主な研究では、「目上から目下へ」という関係に限定せずに、「ほめ」を「相手に肯定評価を与える」、「相手への好感情の伝え」と定義していることがわかる。これは日常生活で言う「ほめ」よりも広い。

その一方で、滝浦(2008)は、ポライトネス理論[1]にもとづき、次のように述べ、自分と水準に差がある目上の人物に対する「ほめ」について次のように注意している。

・ほめは一般に、ほめられた人のポジティブ・フェイスが満たされるポジティブ・ポライトネスの行為である；ほめるということは、ほめの対象となった事柄について、ほめる人の水準や価値観とほめられた人の水準や価値観がつり合う（対等である）ことを認めることである。

（滝浦2008:111）

このように、「ほめ」に関する先行研究では、「ほめ」の定義以外の部分で「目上から目下へ」ということが述べられることがある。次節以下では、どのような観点から「目上から目下へ」ということが述べられているかについて、少し詳しく見ていく。

4.「ほめ」の分類

先行研究では、「ほめ」は、「直接ほめ」「間接ほめ」、「明示的ほめ」「暗示的ほめ」と分けられることが多い。

川口ほか（1996）は、語の表現を、①特に「相手」を意識することなく、自己の感情・認識などを表出すること自体を意図した「自己表出表現」、②自己の感情・認識、知識・情報などが「相手」に理解されることを意図した「理解要請表現」、③自己の感情・認識などに基づく「表現内容」が「相手」に理解されるだけでなく、それによって「相手」あるいは「自分」（またはその「両者」）が何らかの行動を起こし、その行動で「表現内容」が実現されることを意図した「行動展開表現」の三種類に分け、「ほめ」は理解要請表現に属しているとする。そして、話し手の表現意図によって「ほめ」を「実質ほめ」と「形式ほめ」を区別することを提案している。

「実質ほめ」とは、相手自身、相手に関するものごとなどについて心から高い評価を表現したいときのものである。例えば、親や先生が運動会で頑張って走った子供に「よく走ったね」と言うような場合である。「実質ほめ」は、本当にほめたいと思う気持ちを相手に伝えようとする表現であるため、「理解要請表現」の中の「感情・意志伝え」になり、相手は親しい同年輩の人、後輩、部下、家族などに限られる。「実質ほめ」は相手の能力や趣味などの評価にもつながるため、「実質ほめ」ができるのは、「ほめ」を実施する側が、指導や監督などのような評価を行う人、或いはある分野のプロなどであ

る。さらに、川口ほか（1996）は次の例で説明を加えている。留学生が日本人の先生へ「先生は授業が上手ですね」と言うのは不適当だが、中国人留学生が日本人の先生に「先生は中国語がお上手ですね」と言うことは可能である。これは、中国人留学生が中国語のネイティブとして中国語の知識を持っているので、「目上を評価してはいけない」という制限が働かなくなるためであるとされている。

一方、「形式ほめ」とは、ほめること自体に表現の意図はなく、別の表現意図のために行うほめである。「実質ほめ」のような本心からのほめではなく、コミュニケーションを円滑に行うための手段の一つとして行われる。「形式ほめ」は目上の人にも使用可能であり、その場合は敬意を表明するような働きをすることになる。前に挙げた生徒から先生に対する「大変勉強になりました」という表現は、例えば勉強にならなかったとしても先生へのお礼、一種の尊敬としては使用でき、先生とのコミュニケーションを円滑にさせることができる。

大野(2010:39-40)は、日本語の談話における、目上に対する「働きかけ」と「わきまえ」としての「ほめ」について考察を行い、「ほめ」に関わる表現を次のように分類している。

a　評価語による「ほめ」
b　評価語による言語行動X
c　言語行動Xの表現形式による「ほめ」
d　言語行動Xの表現形式による言語行動X

aは、相手の行為に対する評価を述べて明示的にほめる場合である。例えば、相手が相手自身の部屋をきれいに掃除したことに対し、「きれいになった」、「頑張って掃除したね」と評価する場合である。bは、表現上はほめと同じく評価語を用いるが、ほめ以外の言語行動として認識される場合である。例えば、自分の部屋を掃除してくれた相手に「きれいになった」と言う場合は、評価語が使用されていても「ほめ」以外の言語行動（この場合は感謝）として認識される。cは、ある言語行動X（大野によれば事実指摘、羨望、感情、感謝、ねぎらい、祝賀）の表現形式を用いて暗示的に相手をほめる場合である。例えば、小学校で漢字を間違えた児童に教師が「それは違うけれど、そういう違いはとても大事だね。おかげでみんなが気を付けられる。どうもありがとう」と言う場合は、感謝表現を述べることにより相手を間接的にほめている。dは、ある言語行動X本来そのもので、単に言語行動Xとして認識される場合である。例えば、自分の部屋を掃除してくれた相手に「ありがとう」と言う場合は、単なる感謝として認識される。

大野（2010:43）は、「ほめ」は目上から目下への言語行動であり、目下から目上の人物に「目上の物事が良い、好ましい気持ちを伝えたい」という場合は、上記a、b、cのような「ほめ」は用いずに、dで代用すると述べている。例えば、学生が先生に「先生、今日の授業はよかったです」と評価するのは不適切であり、そのかわりに、「勉強になりました」のように事実を述べたり、「ありがとうございました」と感謝を述べたりすることにより、「目上を評価してはいけない」というリスクを回避する。

5.「ほめ」の方法

大野(2010)では、日本語母語話者（計 106 名）と日本語学習者（計 113 名）の目上へ「ほめ」のあり方を見るため、次の四つの「ほめ」の場面でどのように言うかというアンケート調査を行っている。

場面１　今受けた先生の授業がとてもよかったことを伝えたい。
場面２　先生の持っている傘をほめたい。
場面３　先生に見せてもらった写真に、先生のご主人が写っていた。そのご主人のことをほめたい。
場面４　先生が見知らぬ老人の荷物を持ち道案内したのを見た後、先生にそのことについて言いたい。

（大野 2010:247）

大野(2010)が報告している回答には以下のようなものがある。

［場面１］

(1)　先生、今日はありがとうございました。すごく楽しかったです。こういう内容がすごく面白くて、本当に楽しみながら大変勉強になりました。来週も先生の授業を楽しみにしています。（学習者・女・中国）

（大野 2010:251 の例(5)）

(2)　先生、今日の授業とても面白かったです。すごく興味が持てました。（母語話者・女）

（大野 2010:251 の例(7)）

［場面２］

(3)　先生！持っていらっしゃるカサほんとうにカワイイですね。今着ていらっしゃる服ともすごく似合うし、柄もカワイイです！どこで買いましたか！？（学習者・女・韓国）

（大野 2010:252 の例(10)）

(4)　そのカサ、良いですね～。私ビニールがさなんで、こういうおしゃれなのほしいなあ。（母語話者・女）

（大野 2010:252 の例(12)）

［場面３］

(5)　あのスーツを着ている人は先生のご主人ですか。先生はきれいで、ご主人はかっこういいで、二人は本当に似合いますよね。（学習者・女・香港）

（大野 2010:253 の例(14)）

(6)　先生のご主人優しそうな方ですね。とてもお似合いだと思います。（母語話者・女）

（大野 2010:253 の例(16)）

［場面４］

(7)　先生はすごく思いやりがありますね。私たちの見習うべき手本です！（学習者・女・中国）

（大野 2010:253 の例(19)）

(8) さっき先生がおじいさん助けてるの見ましたよー。今時そんな親切な人ひといないからびっくりしました。（母語話者・女）

（大野 2010: 254 の例(21)）

これらの回答について、大野(2010)は次のことを述べている。授業（専門）をほめる場面１では、学習者に「ほめ主体（ほめを実施する側について言及する表現形式)」の言及としての表現が母語話者より多い。傘（持ち物）をほめる場面２では、母語話者と学習者がほぼ同じく直接的な方法で先生の傘をほめており、(3) のように購入した場所を尋ねるものもあった。夫（家族）をほめる場面３では、母語話者でも学習者でもほめやすい対象であり、場面２と異なり、母語話者では (6) のように「と思う」で「評価」を和らげたり、「優しそうな方」で評価語を修飾語にすることで言い切りの形を避けたりするケースがある。道案内（性格・行動）をおこなう場面４では、他の場面と比べて母語話者では評価の方法が最も多様であると大野(2010)は報告している。これらのことから、目上へほめを実現するには、母語話者は学習者より表現を和らげる配慮や工夫が顕著であると言える。

楊（2012）は、大野（2009）の「誰について言及するか」という判断基準に基づき、中国語母語話者の目上への「ほめ」行動について分析を行っている。そして、中国語母語話者の場合、目上に対する「ほめ」行動の使用率は 85%で、「自分に言及する」より、(9)(10)のような「相手に関する言及」のほうが多く用いられることを報告している。中国語母語話者は、相手が目上の先生であっても、相手に直接評価を与える「ほめ」を多用するわけである。

(9)　老师，您的发型很适合您。（先生、ヘアスタイルがとても似合います。）

（楊 2012:45 の例(3)）

(10)　老师，你的英语好棒啊。（先生、あなたの英語は素晴らしいですね。）

（楊 2012:45 の例(8)）

また、楊（2012）は、「利害関係」より「親疎関係」のほうが「ほめ」行動に影響を与えやすいとし、「親しい」相手に対して「ほめ」表現の使用率が高くなるとしている。

6. まとめ

以上、各節で先行研究における「ほめ」の扱いを簡単に見てきた。先行研究では、「ほめ」という表現は、日常生活よりも広い意味で用いられていることと、日常語としての「ほめ」が持つ「目上の人に対しては用いることができない」という意味的制限は、定義以外の「ほめ」の運用のレベルで言及されていることを見た。

〔注〕

(1) Brown & Levinson(1987)により提唱された理論。ポライトネス理論では、人間は誰でも「他者に認められたい」ポジティブ・フェイスと「他者に邪魔されたくない」ネガティブ・フェイスを持っており、この二つのフェイスを満足させるように話し手はいろいろ工夫して言葉や表現を選択してコミュニケーションを行うとされる。

参考文献

大野敬代（2002)「Politeness ストラテジーとしての「ほめ」とその後続要素について」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』9-2、187-197、早稲田大学大学院教育学研究科

大野敬代（2003)「人間関係からみた「ほめ」とその工夫についてーシナリオにおける「働きかけ表現」としてー」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』10-2、337-346、早稲田大学大学院教育学研究科

大野敬代（2007)「「ほめ意図表現」の枠組みと機能」『早稲田日本語研究』16、109-120、早稲田大学日本語学会

大野敬代（2009)「日本語母語話者と学習者の目上への「ほめ」のあり方ーアンケート調査の結果からみえる両者の配慮ー」『早稲田日本語研究』18、60-71、早稲田大学日本語学会

大野敬代（2010)「日本語談話における「働きかけ」と「わきまえ」ー目上に対する「ほめ」と「謙遜」の分析を中心にー」早稲田大学大学院教育学研究科博士論文 http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/36437

川口義一・蒲谷宏・坂本恵（1996)「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15-5、13-22、明治書院

金庚芬（2012)『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』 ひつじ書房

小玉安恵（1996)「対談インタビューにおけるほめの機能（1）ー会話者の役割とほめの談話におけるーという観点から」『日本語学』15-5、59-67、明治書院

滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社

田辺洋二（1996)「褒め言葉の日・英語比較」『日本語学』15-5、33-42、明治書院

松村明 編（2006)『大辞林』(1988 年初版）第三版 三省堂

楊一林（2012)「中国人話者の目上への「ほめ」行動についてー中国人大学生を調査対象としてー」『金沢大学経済学類社会言語学演習論文集』7、39-52、金沢大学経済学類

劉梅（2011)「汉语称赞言语行为研究」曲阜師範大学修士論文 http://wenku.baidu.com